令和３年度　第１回安来市総合教育会議　会議録

１．日　時　　令和３年１１月４日（木）　１４時から１５時３０分まで
２．会　場　　安来庁舎　防災対策室
３．出席者
（構成員）　安来市長　田中武夫
教育長　　秦　誠司
教育委員　小村修司
教育委員　岡本亮啓
教育委員　加藤隆志
教育委員　寺田　禎
（事務局）　総務部長　大久佐明夫
教育部長　原みゆき
政策推進部次長　村社芳行
教育部教育総務課長　遠藤浩二
教育部学校教育課長　三保貴資
総務部総務課長　　金山尚志
総務課総務行政係長　吉原秀和
教育総務課総務係長　足立隆博
学校教育課学事係長　佐伯由里子
総務課統計情報係　　景山爽夏
４．欠席者　　なし
５．傍聴者　　１名
６．議　題　　（１）安来市立小中学校適正配置について
（２）県立高校魅力化推進事業について
７．内　容
○金山総務課長（司会）
失礼します。ご案内しておりました時刻になりましたので、ただいまより令和３年度第１回総合教育会議を開催いたします。皆様にはお忙しい中、本会にご出席いただきましてありがとうございます。議事に入るまでのところは総務課で進行させていただきます。
まず傍聴の希望が１名ありました。これについて議長の許可を得ておりますのでご報告いたします。あわせて今後傍聴希望があった場合には、それも許可するということで確認をしておりますのでよろしくお願いします。なお、どじょっこテレビの方から撮影の申出がございましたので、議事に入るまでのところについて撮影の許可をするということで確認が取れておりますので、あわせてご報告させていただ

きます。

それでは、市長がご挨拶を申し上げます。

〇田中市長

皆さんこんにちは。令和３年度第１回総合教育会議の開催のご案内をいたしましたところ、ご出席いただきましてありがとうございます。なお、平素から教育委員の皆様につきましては、本市の教育行政の推進に格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、安来市総合教育会議は、平成２７年の設置より、これまで安来市教育大綱の策定のほか、部活動や学力向上、ふるさと教育、いじめ問題、ＩＣＴ環境整備など、様々な教育課題について意見を交わして参りました。

本日は安来市立小中学校適正配置と県立高校魅力化推進事業の二つを議題としております。安来市立小中学校適正配置は長年の懸案事項でありまして、教育政策の方向性を共有いたしまして、子供たちが将来への夢や希望を育み生きていく力をしっかりと身につけることができる教育環境を、我々が構築しなければならないと考えております。また、地域の将来への人材をどう育成するかということも本市の将来にとって重要な課題であります。現在、定住対策とともに取り組んでおります県立高校魅力化推進事業について情報提供もさせていただきます。

議題の詳細につきましては、事務局より説明がありますが、委員の皆様におかれましては、忌憚のない意見をどうか賜りますようお願い申し上げまして、簡単ではございますが、開催にあたりましての挨拶とさせていただきます。よろしくお願います。

〇金山総務課長（司会）

ありがとうございました。

それでは、会議に入ります前に、本日の資料を確認させていただきます。まず、事前に郵送させていただきました次第が入ったもの、それから安来市立小中学校適正配置提言について参考資料としたもの。この２部を事前配布させていただいております。あわせて本日、お席の方に席次表を配布させていただいておりますが、ありますでしょうか。

本日の会議終了時刻はおおむね１５時３０分を予定しておりますのでご協力をお願いいたします。なお、本会議は設置要綱に基づきまして公開の会議となっております。資料、会議録はホームページに公開されることになっておりますので、ご承知おきください。

それでは総合教育会議設置要綱により、市長に議長としてこの会議の進行をお願いいたします。

（１）安来市立小中学校適正配置について

○議長（市長）

そういたしますと議題１でございますが、安来市立小中学校適正配置について事務局から説明をお願いします。

○遠藤教育総務課長

失礼いたします。資料１安来市立小中学校適正配置についてをご覧ください。

１．概要についてです。学校教育においては、児童生徒が集団の中で多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていくことが重要であり、小中学校では一定の集団規模が確保されていることが望ましいとされていますが、児童、生徒の減少が顕著となっている現状です。文部科学省においても、「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」が、平成２７年１月に策定されました。

本市においても、年々児童、生徒数は減少しており、学校の小規模化に伴う教育上の諸問題についても、スピード感を持って丁寧に進める考えであり、これらのことを踏まえ、今後の学校施設の適正配置について、安来市教育委員会としての基本方針を策定するために、令和３年４月に「安来市立小中学校適正配置」をテーマとした教育政策推進会議を設置し、提言に向けた議論を進めているところです。

続きまして、２．全体計画とスケジュールについてです。安来市立小中学校適正配置検討に向けたスケジュールにつきましては、令和３年度、小中学校適正配置基本方針の策定、令和４年度・令和５年度、小中学校適正配置基本計画の策定、令和５年度以降、小中学校適正配置実施計画の策定を計画しております。そして、令和３年度安来市教育政策推進会議をスタートさせ、第１回では、委員の皆さんの「教育に対する考えや想い」をお話しいただき、その後、安来市の教育の現状と課題、安来市のこれからの取り組み方を議論いただいた後に、安来市の適正配置基本方針について、検討をいただいております。

３．現在の進捗状況についてですが、計６回予定している教育政策推進会議を現時点では５回開催し、安来市の教育の現状、目指すべき教育について、保護者、地域、学校現場といった視点からの議論を交わし、小中学校適正配置の基本方針策定の提言に向け、検討を行っていただいております。

別紙資料 安来市立小中学校適正配置（提言）について（途中経過）をご覧ください。１ページをご覧ください。

１．安来市の小中学校の現状と今後です。本市の教育は、「第２次安来市総合計画」に基づき、「安来市教育大綱」の理念、方針、目標に向けて、教育行政を総合的に推進し、更なる教育の充実に努めています。

１）学校数の状況です。市内には、現在、小学校１７校、中学校５校の計２２校があります。表１にありますように、中学校校区には、小学校はこのように配置されております。

２）通学の状況です。通学距離については、国により、小学校でおおむね４ｋｍ以内、中学校でおおむね６ｋｍ以内であることが適正とされており、スクールバスを利用している学校、イエローバスを利用して登下校している学校があります。なお、市教育委員会として、遠距離通学補助を実施しています。

３）児童、生徒数の状況です。児童、生徒の推移と今後の見込みについては、児童、生徒数が平成１５年度は３，８４６人だったものが、令和３年度は２，７６６人となり、市町村合併前の平成１５年度に比べ１，０８０人の減（増減率△２８．１％）となっています。また、出生数から推計した令和８年度は２，４９６人と見込まれ、令和３年度に比べて、さらに２７０人の減（増減率△９．８％）と推計されます。

２ページをお願いします。表２、図１は、平成１５年度から令和１１年度までの推移を表していますが、どのエリアでも減少しており、児童、生徒数の増が見込める状況ではありません。

４）学級数の状況です。学級数の現状については、市内小学校１７校の内、８校において複式学級があります。児童、生徒の今後の見込みから、学級数については、さらに減少していくものと見込まれます。

３ページをお願いします。表３、表４は、令和３年度の通常学級数の状況です。

上段の表３は小学校の状況です。小学校において、グレーの網掛けは複式学級を表し、黄色の網掛けは在籍者０人を表します。表の右端にあります児童数ですが、複式学級のある学校で、山佐小学校の全校１０名をはじめ、かなりの小規模となっている現状です。また、この２学年を一緒にしている複式学級でも、児童数が合わせて３名（山佐小、赤屋小）の複式学級となっている学校もある状況です。

下段の表４は中学校の状況です。中学校では複式はありませんが、１校あたりの生徒数に大きな差がある状況です。

４ページをお願いします。表５、表６は、令和３年度と令和１１年度の学級数比較です。

上段の表５、小学校の比較です。比較しますと、複式学級は増傾向であり、また、複式学級のない学校においても、社日小、赤江小、広瀬小など、学級数の減、イコール児童数の減がみられます。

下段の表６、中学校の状況です。小学校と同様に学級数は減少傾向であり、伯太中などは５クラスが３クラスになるなど、影響が顕著に表れています。こういった現状への対応として、適正配置の検討、対応が急務となった次第です。

５ページをお願いします。２．適正配置に向けた基本的な考え方です。

（１）子どもの「育ち」「学び」についての視点として、子どもの「育ち」「学び」を最優先に考えていく必要があることは言うまでもありません。

（２）学校と地域との協働についての視点です。地域との関係も重要な視点であ

ります。学校の適正配置と連携し、地域コミュニティの存続や地域のあり方を考えていかなければならない状況であり、地域の活動や交流センターの役割などを見直していくことも重要であると考えます。

（３）学校施設の整備･管理についての視点です。教育の環境改善に向けて施設整備を進めることが必要であり、また、施設総量の適正化や学校施設の長寿命化の視点も加え、快適で安全な教育環境を確保することが必要であると考えます。

（４）安来市の実情に応じた規模･配置についての視点、１）適正規模についてです。グループ学習指導や集団での教育活動を効果的に進める上でも、一定の児童、生徒数、教職員数の確保は必要であると考えます。多様な考え方に触れる機会の確保は、非常に重要であると考えます。

２）適正配置についてです。国では、公立小中学校の通学距離について、小学校でおおむね４㎞以内、中学校ではおおむね６㎞以内というのが、通学距離の基準として捉えられています。徒歩や自転車による通学だけでなく、スクールバスの運行やイエローバス等の活用も含め、通学距離や通学時間の基準を考慮することは必要であると考えます。

３）小中一貫教育については、小学校と中学校を一貫とする「義務教育学校」、「小中一貫型小学校・中学校」などがあり、教育の円滑な接続を目指す様々な教育のひとつの形であると捉えています。実情にあった一貫教育を様々な学校種で検討する必要があり、適正配置の方針の策定においても、多方面から検討することが必要であると考えます。

７ページをお願いします。３．適正配置の進め方です。適正配置の検討については、学校、家庭、地域などのあらゆる視点から検討しなければならない問題であると認識しておりますが、児童、生徒の減少という現状に対し、子どもたちの教育環境を最優先に考え、適切に分析、判断する必要があると考えます。

（１）地域のあり方と一体的に進めるについてです。学校と地域は密接な関係にある現状の中、学校の再編が必要となった場合、学校と地域の関係も考えていかなければならないと考えます。

（２）検討体制についてです。学校の再編を考えるにあたっては、行政だけでなく関係者の理解と協力が必要であり、３項目記載していますが、十分な協議・期間を確保し、順次進めていくこと、多くの保護者や地域の声が反映できる仕組みとすること、情報をきめ細やかに提供すること、以上が必要であると考えます。

（３）スケジュールについてです。残念ながら、現状では、人口の減少が引き続き見込まれる状況であります。全体計画のスケジュールを明確にし、着実に進めることが必須であると考えます。

最後８ページは、４．委員名簿を掲載しております。

以上簡単ではありますが、安来市立小中学校適正配置（提言）についての途中経

過を説明いたしました。今後の予定としましては、年内に教育政策推進会議から、この提言を受け、教育委員会として小中学校適正配置基本方針を決定し、次年度以降は小中学校適正配置基本計画の策定に向かう予定であります。

教育委員会事務局としましても、学校教育においては、児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていくことが重要であると考えております。丁寧な説明とスピード感をもって、議論を進めていきたいと考えます。

私からの説明は以上です。

○議長（市長）

今、事務局の方から説明を申し上げましたが、各委員さんからの質疑をお願いしたいと思います。

○加藤委員

質問というわけではないんですけれども、やっと教育政策推進会議が今年度始められまして、スケジュール通り６回を数える会議を重ねて提言をまとめていただくという段取りになりました。本音を言えば、ちょっと遅かったかなという気がしています。この図やグラフを見ていただくと、誰が見てもこれは何で今までほっといたんだっていうことを如実に表わしているんじゃないかなと思います。ただ、そんな泣き言言っても仕方ないので、足早に進めていかなくてはいけませんが、やっぱりこの政策推進会議もそうですし、この教育委員会もそうなんですけども、学校ごと、地域ごとですので、対象の子どもたちだけではなく、その地域に住まれてる方々の理解をいただかないとなかなか進めることはできない、机上の空論になってしまう恐れがありますので、慎重に少しずつでもいいですから情報を提供して理解を求める。理解をしてもらうためには知ることが一番ですので、こういった会議、今日は総合教育会議ですけども、ホームページで公開はされますが、小中学校の適正配置のこと考えているらしいっていうようなことはあまり地域の方々には目や耳に触れないと思いますので、極力その辺のコマーシャルを充実させて、ちょっとでも前進することがあれば、早めにしつこく提供していくことが知ることへの第一歩ではないかなと思いますので、ここは立ち退けることなく、少しずつ総論から各論へ流れていくような施策を講じていただければなと思います。よろしくお願いします。

○寺田委員

まず初めに、市長さんも安田小学校に行かれて、クロームブックを導入され、非常に行政として思い切った判断で予算を組んでいただいて、新しい物に子供たちが触れている。私たちも月に１回、各学校に行った時にそういった場面に触れまして、非常に目を輝かして取り組んでいるということで非常にありがたいというような気がしております。学校教育に関しましては、予算がついてまわるものだということを一つ念頭に置いてもらって、この経緯と統計でもわかる通り、今現在どんどん

人口が少なくなることが当然にあるわけでございますけども、そういった面で、行政の方も新規定住者等も募集してるわけですけども、もっと力を入れてもらわないとこの統計以上に人口が少なくなるという、島根県内で流入と流出を比べると出雲市以外は皆、毎年減っているということで、もっと違った視点からでも手立てをしてもらわないと、このままではどんどん少なくなるということで、そこら辺のところをもう少し、行政の方も力を入れていただけたらという気がしております。

それからもう１点は、人口が少ない中で学校を維持することはなかなか難しいということで、統合というと非常に言葉はいいわけですけども、地域の人にとってはマイナスのイメージがあります。私たちが小規模校に行った時に、地域に非常にお世話になっているということを逐一校長先生が言われて、やはり小学校というのはその地域にとっての核だなというような気がしてるので、そこら辺のところも配慮しながら進めていっていただきたいと思います。

○小村委員

教育委員会でその都度、教育政策推進会議の進捗状況は聞いておりましたが、ちょっと１点質問で５ページに交流センターの位置付けというか、そういうものが重要であるという視点で書かれていますが、何か具体的にこの辺り、推進会議の方で具体的な話は出ているんでしょうか。もしあればお話いただきたいと思います。

○議長（市長）

事務局の方から、話しができる範囲でお願いします。

○原教育部長

この学校の適正配置を考えるに当たり、初回から地域と学校の関係性はすごく重要で、学校の適正化を考えるのと同時に地域のあり方も考えていかなければならないというご意見は今に至るまで毎回出ております。

その地域というのは結局どこを指すかと言いますと、地域活動を支えているのはやはり交流センターなので、その交流センターの機能であるとか人的な配置であるとか、そういうことも今改めて見直していく必要があるんじゃないかというお話も出ております。そういったことで、交流センターという言葉がここで出ております。

○小村委員

わかりました。

○岡本委員

失礼します。適正配置に向けた基本的な考え方を示していただいておりますが、一番最初のところで子供の育ち学びというところを視点に挙げていただいています。これに先立つものは、どんな子供を育てたいかというような視点かなというところがあって、安来市独自でこういう子供にしたいんだっていうところを強く打ち出せたらいいのではないかと思ってて、人数がずっと減っていくっていうことは、本当に明らかなところで、逆にその少なさっていうのを生かせるような仕組みを作

り上げられたらなという気持ちがしていまして、それを利用してどんな当たり前のことができるとか。それから、ＩＣＴも当たり前で使えるとか。そうしたところ、強く打ち出せたらいいかなと思ったところです。

○議長（市長）

今それぞれの委員さんからお話をいただきました。私の方からも、ちょっとお話させていただければと思います。

加藤委員から最初遅かったんじゃないかというご意見でした。ご存知だと思いますが私は昨年まで議員生活１５年しておりました。このことは非常に思っておりまして、いろいろできることはやってきたと思いますけども、なかなか進んでなかったことはもちろん私も現場におりまして認めざるを得ません。そうではありますけども今早く進めていきたいという思いがございます。

また、寺田委員の方からも申されましたように、移住・定住を進めるにしても教育問題は重要視されておりまして、昨日も子ども未来という団体の方と意見交換会をしまして、安来市のことをいろいろお話をして、座談会形式で楽しい意見をいただきましたが、いずれも県外から来られた方ばかりでした。お母さんでしたけど、遠く福島から大阪、神戸、それぞれがそういう子ども未来という組織を作っておられまして、もっと会員はおられるようですけど、なぜ安来に住んでいるかというと安来がいいところだから住んでいるということもおっしゃいました。１人の方は福島から松江に移住してきたんですけれども、松江よりも安来がいいということで、安来に移ったということを言われました。その方々は食べ物のことを一番言われましたけど、オーガニック野菜を取り入れるとか、そういう話をされまして、私もいろいろお話したところですが、食と教育ということを言ってられまして、移住先に求めるものの中でやっぱり教育が移住するときの最大の関心事であるということもその方々が言っておられましたので、早くそういうことを取り入れながらやっていかなければいけないと思っております。

あとは小村委員の方からの交流センターとの関連ということでお話いただきましたけれども、交流センターのあり方も同時に今話を進めていければというような思いで、今いろいろご案内しながら話をしていただいております。ご存知だと思いますが、交流センター２４館の中の１０館が広瀬方面でございます。安来市内と伯太については交流センターは少ないという状況です。岡本委員の方からいろいろ話されましたけども、小さいことはいいことだということもございます。

そしてまた全体を通じて言えることはやっぱり、交流センターと小学校を比べますと、今まで学校がなくなったところがたくさんございます。小学校・中学校がなくなって、広瀬方面が統合されました。抵抗があったと思います。でも、考えてみますと、朝、家から出て登校すると、地域には昼間いないわけです。夕方は必ず帰ってくるわけです。だから、地域の関わり合いというのはもちろんございますけれ

ども、子供のことを中心に考えると、いろいろ意見があると思っております。

私の地域は幼稚園が一番に廃止されました。その時に地元の反発は、特に公共施設、教育的なところが一番でした。これがこれから通用するかどうかわかりませんけど、その時は、この施設を託すだけではなくて、立ち行かなくなったので、今度はこれを放課後児童クラブに利用しようと思いますということで今大々的にやっておりまして、今は能義や飯梨から季節によっては宇賀荘の方に児童クラブとして来ていただいております。そういうことで今は地域の方々も納得していただきましたが、これがすべて通用するわけじゃありませんが、小学校の先々、統合ということが本当に現実となりますと、地域の方々にとって納得いくような利活用もまた考えていただければなという思いもあります。私の方がそういうこと言ってあれですけども、そういったことを経験を踏まえましてですね、いろいろ考えていただければと思います。

以上でございます。引き続きご意見をいただきたいと思います。

○寺田委員

市長さんの方から今、先々統合云々という言葉が出られてたわけですけども、その残された施設と、先日私も市長さんのお膝元の、宇賀荘小学校の父兄さんに会ったときに、やっぱり人数が少なくて、ある程度統合の覚悟はしているけども、そのあとの施設、要するに今の学校とか体育館やなんかが非常に、ぼろいっていうと失礼ですけども、体育館なんかも天井がない。音響がものすごく悪くて、もし仮に地区の住民に渡されて、そこで何をするのか。スポーツ以外何も使えない、コンサートをしようもんなら、音が非常に反響して使い物にならないというところで、そういったところも、飛ぶ鳥後を濁さずじゃないですけれども、統合したときには地区に必要な財産として、有効利用できるような状態で引き渡してあげれたらというような気がしております。その地区で例えばそこでコンサートをしたい、ちゃんとしたところで児童保育がやりたいというなら、それなりの施設もきちんとしてあげて、引き渡すっていうようなことも必要じゃないかというような気がしておりますので、よろしくお願いします。

○議長（市長）

いろいろ意見いただきましたが他にございませんでしょうか。

今日は複式学級についての議論はしないと言うことでよろしいですか。

○遠藤教育総務課長

複式学級等につきましてはこの第６回の政策推進会議のところで最終的な結論をその会からいただこうと思ってます。それを受けた後にまた、教育委員会での議論となろうかと思っておりますので、今回は複式学級等の具体的なものについては、今回の対応をお示しするものはございません。

○議長（市長）

先ほど寺田委員からお話があった安田小学校ですけども、全小中学校同じ事やってるようですけれども、今、伯太中学校区がモデル地区になっておりまして、そこに伺いまして思ったことがですね、非常に食いつきがよくいい事業だなと思いましたが、その時に思ったことは、井尻小学校が一学年が２名、赤屋小学校が一学年４名でリモートをしていました。非常に教育環境に差があるなと思いました。安田小学校は一学年２０人以上いまして、その位いますといろいろ切磋琢磨するといいますか半分ぐらい進んだ人がおられまして、いろんな意見を言いながら話し合いをされます。ですから、個人の能力というか、児童の発達過程で必要なことをできるのは、ある程度人数がいないといけないんじゃないかなと私は素人ながら思いました。

私も国とリモート会議をいたしますけど、全く内容がないように感じてまして、大事なことは必ず、霞ヶ関に行って話をしないと、総合的に意思の疎通ができないような気がしております。教育的にどうなるか私もわかりませんが、リモートリモートといってもなかなかリモート教育でいいとは思わなかったです。

それと今後、全国でＡＩトライアルという高校が指定されまして、ＡＩのことにトライするというようなイメージのようですが、全国で６校に選ばれたのが、安来にあります情報科学高校です。神戸までに５校と神戸以西沖縄まで含めて、情報科学高校だけのようです。そこでいろんなことをやっておりまして、小中学校の教育にも大分影響があるようで、様々な対応をしていただいております。地域全体にもですが、提案いただいております一つに、ＡＩ搭載の人型ロボットＰｅｐｐｅｒくんを導入してはどうかという提案をいただいておりますので、今後また皆様方とお話をしながら、導入に向かっていきたいなという私個人の意見もございます。ソフトバンクが中心となって、このプログラミングを小中学校でするという話をいただいてまして、また展開が一つずつ変わってきますと、ある程度の人数が必要でないかという気はしまして、目の前にそういうことがあって集中して取り組んでいただくことも必要なことではないかと、私も専門ではございませんがそういうことを感じました。

他に意見がございましたらお願いしたいと思いますけども。

○加藤委員

今、田中市長さんにも説明していただきましたけど、まさに、そういうことなんだろうなと思いますし、それから今日は、小中学校の適正配置というテーマですので、ちょっと私が気になるというか、将来どうなってしまうのかなと思うのが参考資料の２ページの表２、令和１１年度までの児童数が書いてありますけども、令和１１年度は大体これぐらいの推定だと思うんですが、適正配置を考えるときに人数を優先して考えるのか、エリアを優先して考えるのか、それとも市街地、中山間地を切り離して考えるのか。そういうことを建設的に考えないと、前に進んでいかないんですけど、この表を見ると、安来・広瀬・伯太と分かれてありますけど、市街

地の安来の方は、減少率２３０人ぐらい令和１１年度で減るんじゃないかというようになってますが、その減少率からすると広瀬町、伯太町がものすごい勢いで減っていくような気がしています。実際減っていくんでしょう。ですので子供が減っていくというよりは、生産年齢世代ってよく言われますよね。ああいう方々が、親御さんですよね簡単に言うと。そういう方が職を探してやっぱ市街地に出られるか、転出されるか、仕事の都合でっていうのが非常に多いんじゃないかなあと思います。それに伴って子供も減少していく。もう安来市も、伯太町と広瀬町と一緒ですので、一体的に考えないといけないんですけど、やっぱり広瀬町と伯太町については、学校や交流センターをどうこうってなかなか構いにくいと私は思うんですが、人数を優先するなら、今市長がこの人数では子供たちの学習上支障があるように私は思うよと言われたのは本当にその通りだと思います。ですので、どこを視点に考えたらいいのか、皆さんの理解を求めたらいいのかっていうと、両方を総合的に考えていかないと、この過疎の勢いというのは止まらないと思います。

ちょっと話は違うんですが、私も仕事柄情報が入ったんですけど、皆さんもご存知の通り７月８月に雲南地区が大きな災害を受けました。約４０００ヶ所の災害ということで、これから災害復旧工事が盛んになる地域ではあるんですが、全く手がつけられない状況です。結局働く人が山間地域にはいないということで、それだけ仕事があって早くと直さないといけないけれども直す術がない人がいない。なので、浜田の方に応援を要請しているという話を聞きました。ただ浜田も忙しいので、応援に駆けつけることは多分できないということでした。来年の３月から災害復旧工事が始まるのに手がない材料がないという状況で、それに相まって、この間新聞にもありましたけども、雲南地区は奥の方ですのでお米がおいしい。農家さんがたくさんおられますけども、高齢化していて、そこに土砂が流入して、来年作付が難しいと。この際もうやめるかということで、離農される方が非常に増えていくということで、一度こういう災害が起きるとその地域が一気に衰退してしまう。このようなことは安来市においても、いつ起こるかわからないというそういう例だったというふうに思います。

ですので、なんでそこの地域に人がいないのか、子供がいないのかということはこの契機に、その施設利用をもう一度考えてもらって、今市長が言われたように、廃合した後のその学校や土地や体育館をどういうふうに利活用していくのか。それだったら夢があるんじゃないかと、Ｕターンして帰ってくれるきっかけにならないのかなと思いますので、その辺も同時ではないかもしれませんが、一緒に考えていただければなと思います。おそらく適正配置のことばかり考えると完全に後ろ向きな発想ばかりになって誰が責任取るかという話になってしまうので、そういうことにならないように配慮していただきたいなと思います。

○議長（市長）

この問題は特に大事なことだと思っています。今、中山間で一番よく頑張ってる比田地域は戸数はそうたくさんございませんけれども、その方々は比田を守っていこうということで、いろいろなことを自分たちで考えておりまして、えーひだプロジェクトということで、カンパニーをつくってそこで地元を守ろうという意識でやっておられます。行政の所有財産も、いろいろなことで使いたいという提案をいただいたりしております。先ほど言いました子ども未来という組織に入っておられる大阪から来られた奥さんも比田の方へ嫁いでおられ、比田の地域の人のそういった教育も含め、地域活動としてみんなをどう守っていこうという意識がある限り、人が呼べると思いますと言っておられました。行政があれこれやるということばかりでなく、地域の人たちが地域を守っていこうという中でできてるもんだということを一つ思っています。

今約２０ヵ所の地域や団体に呼んでいただいて、座談会形式で市の行政の現状をつぶさにお話をしております。その中でじゃあ自分たちがどうするかということを考えてくださいって話ししてましてですね。こういった小中学校のことを今回初めて皆さんで議論されて、これからだんだんとわかってくると思いますが、おそらくこういうことを真剣に議論したことはないってことは、市民の方はこういう数字のこともきちんとしたことは把握してないと思うんですよ。行政が持っている情報をきちんと正確にお伝えして、その中で何ができるかということを一緒になって考えていかないといけないなということを思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

〇秦教育長

失礼します。先ほど加藤委員の発言を伺いながら、先日の推進会議の終わりの方だったんですけど、提言案を審議してもらったんですけども、委員さんが難しいことはよくわからないけどワクワクしないですねみたいなことを言われたのがすごく心に引っかかっていたんです。つまり、ずっと安来の特色ある教育とか、目指す教育、それから子供の学びや育ちを中心に検討してきたんですけれども、結局のところ統合であるとかそういったような現実の話になってくる。いわゆる縮小してしまうというんですかね。そういったようなイメージといいますか、そういうものをお感じになった感想をいただいたのかなと思っています。

これから適正配置を進めていかないといけないと思ってるんですけども、その際にやっぱり、子供たちが特に今まで通ってた学校が統合されて例えば新たなものになった時に、夢や希望とか志を高めながら、新しい体制に向かっていってもらうようにしていかなきゃいけないだろうと考えたところです。

ただ、教育はＰＲだけをすればいいということではなくて、日々の活動の中で子供たちが着実に成長していくという、ある面非常に地道な取り組みでもありますので、そこら辺はきちんと担保されるような体制を今後検討することで、子供あるい

は保護者の皆さん、それから地域ということになって、先ほどありましたけど、地域づくりの核としての一つの交流センターをどういうふうに持っていくかというのは、総合的な議論といいますか、体制も踏まえながら、委員会の方は進めていく必要があるのかなと感じているところでございます。

個人的には、やはり学校というのは、ある程度人が集うことによってエネルギーが出てくるという側面がありますので、当たり前のことのようなんですけど、今年の６月の教育再生会議の提言の中には、学校の集う機能を生かすという、そういうような文言がポッと出たりしておりまして、やっぱりその中でＩＣＴを活用しながら、これからの社会を生きていく子供たちの力を身につけていくという、そういうことを改めて提言をしたというふうに私は理解をしておりますので、長くなりましたけれども、夢や希望を育む、適正配置、適正規模の議論、あるいは今後の体制というところへ、市長さん、市長部局の皆さんと協力しながら進めていかないといけないのかなと思っているところです。

○寺田委員

皆さん言われるとおり、夢と希望のある統廃合なんてまず難しいと思うんですけども、私は伯太地区からの選出で、この推移を見てもわかるとおり、平成１１年度には２１２名、小中学校合わせて現在の社日小学校や広瀬小学校と同じレベルになってしまうということで、大体２００人ぐらいいるのが一番いいのかなということで、先走りかもしれないですけども、小中一貫校ということも一つ試みてもいいのかなと思っております。宍道や境港の方にあるそうなんですけども、その小中一貫校がどういったような仕組みでやられてるのかはよくわかりませんが、イメージとしては、新しいことに挑戦する、その学校だけつくるのではなくて、中身も当然充実したものにするだろうし、その近くに住宅をつくる。そうすると、人が住めばまた新たな子供たちが増える。そして、その近くにまた商業施設も誕生するのではないかということで、学園タウンといいますか、そういったものの構想の中で、伯太地区をモデル地区にやっていただけたらいいかなと思っています。

非常に奥の方の地域、悪いですけどもこれ以上手をかけてもなかなか人が住まない、猪が増えるばかりというような現状の中で、人が来てもじきに出てしまうというような悪循環を繰り返すよりも、そういったところで伯太町の中心部から、米子にも多少通えるし松江の方も通勤圏だと思いますし、ましてや伯太町内にその働く場所がまた新たにできれば、非常に栄えていくんじゃないかっていうのは、未来構想が持てるような考えじゃないかというの私は思っておりますので、そこら辺のところもひとつお願いできたらと思います。

○議長（市長）

今寺田委員が言われました他市のことですが、米子市の小学校ですね。これから先、複式になる見込みなので統合ということで、複式になることが当たり前のうち

とは違うんですが、複式になることを見込んで義務教育学校にされたと。島根大学の先生が来られて指導されたようですけれども、複式学級が駄目だということではないかもしれませんが、そういうことになると先生の数が減りますよね。６学年ある時は、例えば担任が６人おられる。１、２年、３、４年、５、６年の学年になると担任が６人が３人になる、極端に言うと。補助があるんでしょうけど、そういうことを思っておられるようです。

それからもうひとつは部活が限定されます。二中と伯太中学校は、野球部が存続できません。バレーボール部が存続できません。小学校はもちろんです。例えば二中は３つの小学校が一つになって、やっと野球とバレーができるんですけども、誰か一人でも怪我して休んだ場合は出場できないという状況です。二中で私の孫が野球をしておりまして、今は下級生が入ってきてチーム組めましたけど、それまでは９人しかいなかったようで、９人では公式試合に出られないそうですね。どうも公式が１０人以上だということで、ブラスバンドから人を借りてきて、ユニフォーム着てもらって座ってるだけでいいからと言って出たんだそうです。そういうことはもう現実に今起きてまして、この先どんどん増えるんでしょうけど、統計を見ていて今日現在が生まれた方がわかりますし、よくない現象ですが、少子化が進んでいくことは間違いなくて、何とかして止めないといけないといいながらも、現状そうですので、そういうことを考えていかないといけないこともあります。大きい学校だと全く考えられないことですけれども、私昔はですね、小学校も分けられたことがありまして、宇賀荘地区ですけど、私が小学校に入ったときは、一学年は７７人です。全校生徒が３８０人いました。中学校へ行った時には一学年２００数十人になりまして、それが３学年あって、マンモス校といいますか。それが普通でしたけれども、だから切磋琢磨して生存競争で大変ですが、そうでなければいけないというわけではないんですが、今の状況としていいことがあるのかってことは、今、父兄が一番案じておりまして、現在子どもがいる父兄で、こんなことでは自分たちの子供は遅れてしまうと。確かに複式はマンツーマンでもできますので、成績が下がらないと言われていますけど、人間関係は上手じゃないです。私事ですけど、一番上の孫は今高校で、高校入って初めてクラス替えがあったと。小中学校全くクラス替え無しです。二中と伯太ではそういう学校がまた増えるということですね。だからその辺を、どこかモデル地域にしてもらってでもいいですのでそういうことをやっていかないと、今まで過去１０年間ぐらい何をやっていたかということもありますけども、そう言ってもどうしようもありませんので、何とか切実なこともございますのでまた考えていただければと思います。

○小村委員

適正人数というか、これは今後まだ話し合われる内容であるかと思いますが、前回か前々回の教育委員会の時には不登校の数字を見せていただいて、全国的なレベ

ルから見ると、島根県は不登校の傾向の子が多いということで、先ほどおっしゃいましたが単式のクラスだとずっと中学校までクラス替えなしで、逃げ道がないわけですよね。それで、校区外へ出られる人もこの間の話では６０人ぐらい安来市内におられるということで、校区外に行くことがいいか悪いかは別として、できればその学校の中でクラス替えがあった方がこれからいろんな子供が増えてきて、不登校傾向の子もまだ増えるかと思いますので、そういった中で複式は割と学年が組み合わせが上と下と、年によって変わるので、何となく紛れる部分もあるかもしれないけど、逆に単式の１学級がずっと続く学校は６年間もうメンバーチェンジなしというのが中には本当にそれが辛いというような子が出てくるんじゃないかなと思います。そういうことも多少考慮できたら、現実的にできない部分ももちろんあると思いますが、一つ考え合わせていただきたい要因の一つかなと思います。

以上でございます。

○議長（市長）

どうでございましょうか。いろいろご意見伺ったとこですけども、事務局の人はどうですか。今回はこのぐらいでよろしいですか。

○原教育部長

いろいろご意見いただきありがとうございました。

一番、その肝になります安来市としてどれぐらいの規模が適正かについては、先ほど遠藤教育総務課長が言ったように、最終の推進会議の提言を受けて、それからまた教育委員会でお話をさせてもらって、またこの総合教育会議でも、ご議論いただければと思っておりますので引き続きよろしくお願いいたします。

○議長（市長）

そういたしますと、たくさん聞いていただきましたので議題１については、このくらいでと思っております。

議題２の県立高校魅力化推進事業につきまして、事務局から説明をお願いします。

○村社政策推進部次長

失礼いたします。政策推進部次長の村社でございます。

委員の皆様には日頃から多岐にわたりましてお世話になっておりますことを、この場をお借りいたしまして、厚く御礼申し上げます。

さて安来市では、今年度から県立高校魅力化推進事業にやすぎ暮らし推進課を所管課といたしまして、着手したところでございます。県が管轄しております県立高校を核とする取り組みではございますが、子供たちの将来と安来市の未来に直接的に関わってくる内容でありますことから、今後は、安来市教育委員会との連携体制を強化したいという考えもございまして、そのお願いも兼ねまして、説明の時間を頂戴した次第でございますのでよろしくお願いいたします。

それでは２ページの資料２をご覧ください。まず１番の経過でございます。令和

４年度から導入されます高等学校の新学習指導要領では、情報化やグローバル化などが急速に変化する社会に適応する力を育てることに、主眼を置きまして、各教科の構成の見直しなどが行われると伺っております。これに先立ちまして、島根県の教育委員会では、子供たちに地域や社会の未来を切り開くために必要となる生きる力を育むための教育方針を示す県立高校魅力化ビジョンを平成３１年２月に策定いたしました。このビジョンでは、地域との関わりを深めることで、教育の質を高め高校の魅力化を図ることとしておりますが、高校のみの力でビジョンを実現することは困難であることから、各高校が所在している自治体と地域に対して協力を求めてきているところでございます。一見しますと、県が勝手に始めた取り組みを市が手伝わされる、また、他人事を押しつけられるというようなイメージをしてしまいがちでございます。しかしながら、このビジョンは、高校の魅力化だけではなく、地域の魅力化と地域の将来を担う人材の育成を一体的に目指しており、人材還流サイクル、つまりは若者が地元に戻ってきて定住してくれる、新たな流れを起こそうとしてくれています。長い目で見れば、安来市の定住対策にも大いに寄与することが期待できるものでございます。となれば、決して他人事ではなく、むしろ市の将来に直結する自分事としてとらえるべきであることから、今後は安来市として当事者意識を持って積極的にビジョンの実現に向けて取り組み、地域に対しても理解を求めていく方針を固めたところでございます。

２番をご覧ください。近年、若い人材が流出し、地元に戻ってこない現状がございます。その大きな理由といたしまして、これまでの高校３年間の過程に問題があることに注視しなければなりません。小中学校で実施しているふるさと教育は、高校に上がると途端に途切れてしまいますので、生徒は地域の産業や文化、地域を支えている自治活動など、多様な営みに接する機会がなくなり、せっかく義務教育で積み上げていただいた地域に対する思いが、高校３年間でリセットされていきます。その結果、地元に定住するという選択肢をイメージする機会に恵まれないまま、進路の選択に向かってしまっていることになります。

この３つの枠にお示ししておりますように、高校では地域との関わりがないまま、メディアを介した都会の魅力に漠然と憧れを抱く。地元には何もないという認識を持ったまま、都会の大学に進学し、都会の環境に適応することに必死になる４年間で、一層ふるさとへの思いが薄れていく。そのまま都会で就職し永住。戻っておいでよと、Uターンを呼びかけても響かない。ということがすべてではありませんが、こうした流れが少なからず定着しているのが実態であるというふうに考えております。この悪い流れを断ち切りまして、新たな人材還流サイクルの流れを起こすには、高校３年間で安来もまんざら捨てたもんじゃないなと、思えるような経験をさせてあげることができるか否かが鍵となります。

３番をご覧ください。その具体的な取り組みといたしまして、小中学校で実施す

るふるさと教育の後に切れ目なく接続する形で、地域の課題を題材にして行う地域課題解決型学習を県内すべての県立高校で強化することになりました。これは、地域の企業や団体など、様々な分野が今抱えている課題を見つけ、それを掘り下げ生徒自身が地域と深く関わりながら、実践形式で解決策を導き出すという学習を正規の高校の授業として取り込むものでございます。実際には、インターンシップなどにより、様々な現場体験をしたり、現場の従事者にお願いして講師になっていただき、ディスカッションを重ねたりいたしまして、身近な実社会をフィールドに実在する課題と向き合い、現実的に役に立つ解決策を生徒自身に考えさせるという内容です。いわば、小中学校のふるさと教育をさらにグレードアップした方向からのふるさと教育とお考えください。

この得られる成果といたしましては、高校が地域の課題解決に向けて努力する人材を育てていると認知されれば、その高校の評価は上がり、入学したいと手を挙げてくれる地元の中学生も増えるでしょうし、企業からの求人増加も見込まれ、目標とする高校の魅力化の実現に繋がっていくことになります。同時に安来で生きていくというイメージを待つ地元志向の生徒も増え、一旦は都会の大学に進学しても、安来に戻ってくれる動きにも繋がり、人材流出に歯止めが効くことになります。さらには、都会に就職したとしても、折々に安来を支援してくれる関係人口となってくれることも期待できるわけです。

近年、企業が採用の募集をかけても手が挙がらないとか、町内から若者がいなくなったなどの声があちらこちらから上がっております。総じて、市内の様々な分野で後継者がいないことが、町の機能をこれから維持していく上で深刻な問題であります。まずは人材還流サイクルを起こすことが解決の糸口であり、この取り組みを推進する価値は大きいものと考えております。

３ページの（１）をご覧ください。ビジョンを具現化していくための方針決定や、実働の中核を担う組織としまして、全ての県立高校に高校と地域の共同体制、高校魅力化コンソーシアムを令和３年度中に設置することが義務づけられました。高校を始め市、小中学校、大学、社会教育機関、地元企業、地域の住民、また商工会議所等の関係団体などの地域の多様な主体が参画していただくことになっております。市内２校のコンソーシアムの設置状況につきましては、情報科学高校は令和２年度に設置済みでございまして、専門であるＩＴ分野に関連する取り組みを、すでに始めておられます。安来高校は、今年度内の立ち上げを目指して準備を進めておられるところでございます。

ただし、このコンソーシアムを立ち上げたからと言いまして、すべてが円滑に動き出すわけではございません。高校はあくまで教育機関であって、地域に精通しておらず、地域は全く教育や高校の様子がわかりません。異なるベクトルで動いておりますこの両者が、協働体制を構築するということは決して簡単なことではござい

ません。

そこで、（２）をご覧ください。コンソーシアムを効果的かつ円滑に機能させるため、高校と地域が行う共同活動をプロデュースする、運営マネージャー及び地域側で様々な調整を行う魅力化コーディネーターを各自治体の裁量で配置するように、県教育委員会が求めてきております。

下の図、高校魅力化コンソーシアムの業務イメージをご覧ください。左上の高校の枠内では、校長と主幹教諭等が中心となりまして、地域課題解決型学習などを実施して、最終的に生徒を進路決定に導いていきます。右の地域の枠内では、魅力化コーディネーターが中心となって、地域課題解決型学習のサポートやインターンシップ先の開拓など主に地域側での調整を行っていきます。そして、この両者をうまくマッチングして、共同活動を演出するプロデューサーの役割を担うのが下の枠の運営マネージャーであり、高校と地域、各主体の良好な関係性をキープしながら、コンソーシアムが上手く機能するための働きかけを行っていきます。

この体制を整えることが急務でありましたために、本年９月の議会において予算措置を行い、両校の運営マネージャーと魅力化コーディネーターの職務すべてを兼務する高校魅力化推進員１名を１０月１日から配置したところでございます。少しその職員の紹介をさせていただきます。その方の名前は山根久美子さんでございます。子育てや地域連携の取り組みに対しまして非常に造詣が深い人物であります。やすぎ暮らし推進課所属の会計年度任用職員として、月曜木曜は安来高校へ、火曜水曜は情報化学高校へ、金曜だけが安来庁舎に勤務していただくという体制で、早速忙しく精力的に活動を開始していただいております。小中学校側と高校がお互いに協力し合える関係をこれから築いていく、キーマンとなることも役割の一つでございますので、今後は小中学校側のフィールドにも、お邪魔をさせていただくということがあろうかと思っております。

以上が、高校魅力化に関する、この直近での動きの概要でございます。あくまで県立高校は県の管轄ではございますが、今後は、小中高で一貫したふるさと教育を推進していく上で、県と市、また所管する各部署の垣根を越えた連携が必要になってくるという考えでございます。

委員の皆様には、何卒この取り組みにご理解をいただきまして、お力添えを賜りますよう、よろしくお願いいたします。説明は以上でございます。

○議長（市長）

事務局の説明が終わりましたが、この件につきまして質問やご意見がありましたらお願いします。

○岡本委員

途中で出てきました小中学校とそれから高校と、そういう縦の繋がりを大事にしていって、それを元に地域全体を発展させていこうというような考えだと思うんで

すけど、実際小学校に勤めたことありますけれども、その時に高校の先生は一人も知らない、全然知らない高校のこと一切知らない。そういう状況でした。中学校もあんまり交流が深くはできていなかったですけど、これからそういうところを目指していくというところで、いいことなのかなと思いますけれども、なかなか壁は厚そうだなと思ってはおりますが、そういうのができると、さっきちょっと言葉足らずで少人数の方がいいみたいなそういうような意味で受け取られた方もいらっしゃるかもしれませんが、少し大きな塊で教育ができていて、またそれが縦に繋がっていく、団子みたいな感じ。そんな感じで教育が構築されていくといいかなと思っていて、特に学校の中でも、１年生から２年生に上がるときに、この子はこういうふうになったということを、あまり十分に伝えられずに、今まで自分はやってきたんじゃないかなっていうところがすごく反省していて、そういうのが、縦にこう、小学校も中学校もまた高校にも、そうした情報がきちんといいところももちろんだけども、ここは矯正しないといけないとか、そういう指導、支援をしていかないといけないというような、何か細かな情報がうまく繋がって、その子の支援ができるっていうふうに、そこの機能を使ってできるといいなと思ったところです。

○議長（市長）

いい意見を岡本委員からいただきました。最初にお話してしまいましたけど、情報高校だけではなくて安来高校につきましても、魅力化コーディネーターとして採用しました山根さんがいろいろやっていただけるということでお願いをしております。この方は、ご存知の方もおられるかもしれませんが、十神交流センターに今までおられまして、一中校区でたまたま昨年度の一中のＰＴＡ会長でした。個人的なことですが、私の娘もちょうど二中のＰＴＡ会長をしてまして、２人で非常に仲良く、いろんなことやっていたものですから、その中で私も様々なつき合いがありました。それで、いろんなことやっておられるなと。地域活動をされておりまして、十神交流センターですので、安来のまちの中のいろんなことやってられました。また、ご本人は情報科学高校ご出身でして、娘さんが安来高校に入られまして、両方の学校の先生方ともいろいろと直接お話ができるということで、この仕事をどうですかっていうお話したんですけども、今一生懸命やっていただいております。

今は地域と、特に今後市内の企業に協力もしていただいてということをお願いしておりますので、企業と学校、地域を繋ぐということでやっていただいております。

最初に申し上げましたけど、ＡＩのトライアル校としては指定を受けたのが情報科学高校でありまして、じゃあ安来高校は何かって言われますが、今度提案を受けてますのは、情報科学高校の非常に先進的な情報科学高校の授業を４コマ分は安来高校、普通高校で進学校なわけですが、４コマは共通課題としてやっていただくようです。その中でも先ほど申し上げましたＡＩ搭載の人型ロボットを活用してはどうかということで、情報科学高校には一つ入りますので、それをまわして安来高校

も同じことやっていけばという提案を受けてますし、私どもで提案受けてますのは、小中学校にも情報科学高校でプログラミングをしていただいたものを、教室の教材といいますか、それに向かってプログラミングを勉強してはどうかということもいろいろ提案を受けておりますので、また今後、庁内の中でいろいろ議論しながら進めていければと私は個人的に思っております。

私は昨年まで市議会の議長をさせていただいて５年ほど勤めましたけれども、成人式が必ずございまして。その時に、来賓の代表として挨拶するわけですけども、必ず言いますのが、成人に向かって、「あなた方は安来で育ったけれども、父兄から言われてることは恐らくは、安来は何もないからつまらない所だから出て行けと言われたんでしょう。もっともっと安来のことを知ってもらって、好きになってもらわないけませんよ。」ってそういうことをずっと長年言ってきましてね。そう言ったらどじょっこテレビで、安来を好きになる番組を作りましょうということなりまして、今「やすぎがスキ」という番組を作ってもらってます。

ですからそういうですね、安来のことをもっと知ってもらうこと、好きになってもらうってことは、初段階ではありますけど、次は実際にこうやって小中学校と高校が連携して頂くと非常にいいのかなという期待をしております。

〇小村委員

質問なんですが小中学校は総合的な学習の時間っていうのが週２時間ぐらい確保されてるんですが、高校の学習指導要領には、こういう地域課題解決型学習をするための時間的な枠が確保されてるかっていうことが１点と、それから、前にどじょっこテレビさんが安来高校の１年生が安来節演芸館に行って、２、３人グループで発表してましたよね。あれはこの一環だったのかなっていうなことも、もしわかれば教えていただきたいと思います。

〇村社政策推進部次長

正式な授業でカリキュラムとして組み込まれているかというようなことだと思いますけども、そのように伺っておりまして、この制度の中では、地域課題解決型学習というタイトルではございますけども、授業の名称としては「総合的な探求の時間」というような授業名称で、生徒が取り組んでいるように聞いております。

それからニュースでご覧になっていただいた安来高校の１年生の取り組みとして、安来節演芸館に対しましての取り組み、これもまさにこの授業の一環でございまして、急遽安来高校でも今年度からこの取り組みが活発に動いていただいております。私ども市の職員も急に先生方と距離が縮まった感じもしておりまして、いろんなことの連携ができるところから始まっているというところでございます。１年生をグループ分けしまして、最終的には約４０のプランをプレゼンしていただきまして、その中からできそうなことを取り組んでみようということで、今、安来節演芸館の方でも動いてるように聞いております。

あと、ちなみにですけど２年生でも、この取り組みでまず市役所の仕組みを知ろうということで、市の主立った部署から８グループ職員を派遣しまして、安来高校の教室８個を借りましてですね、そこにグループ分けをした２年生の生徒が次々と来て、２５分ずついろいろな説明をさせていただいて、そこから着眼したところ例えばあるグループはごみの問題について掘り下げるということで、ゴミの担当部署に行って話をさらに深掘りして聞いていくっていうようなことも始まっております。

以上でございます。

○議長（市長）

この取り組みは、私が１０月に就任させていただいて１１月か１２月にすぐ島根県の教育長が来られましてね。今まで提案したけれども、進学は松江に行けばいいという感じで行政はやっておられたけどって言われましたよ。いやそんなことありませんっていうことで、安来高校や情報高校がありますよねっていうことでそれから、この取り組みが始まりました。真剣に取り組んでいただけますかということで、いやうちは全力で取り組んでいきますよと、始まっておりましてですね。ですからもうこのコンソーシアムを地域ぐるみでやるってことを今年度からやっております。

最終的には、市内に残っていただく、帰っていただくってことが、最終的なあれでして、どうも伺うところ今度、島根大学も入学の方針が一部変わって、へるん入学ができまして、地域の方の枠を設けて理系ですかね教育以外のところ、学問だけじゃなくても地域活動を点数に入れてというふうな説明を受けましてですね。で、とにかく安来で学校に行ってもらって、例えば大学出て全部じゃないでしょうけど、必ず帰ってきていただけるような取り組みをみんなでやっていくということにしております。

あと県立高校の中で、寄宿舎がないのは県内で安来だけでして、県にはいろいろ申し上げておりますけども、今安来市でいろんなことを検討していただいております。市外、県外からたくさん入学志望がありまして、情報科学高校は特に、またクラブ活動で安来高校も入学志望がありますが、そういった受け皿が今あまりありません。それについて安来市の方で今取り組んでいただくように、検討していただいておりますので、一生懸命で、我々もやっていこうと思ってます。

○寺田委員

今年も中学校の３年生の職場体験ということで、我が家の方にも時期をずらして４名ほど来ていただきましたけど、高校は松江農林の人が、たまに２、３年に１回は来られるんですけども、安来高校や情報高校の方たちが職場体験でインターンシップみたいなことは安来市内でされてるのかどうか聞きたいのと、それから、当然、大学に進学して、島根県内の大学がそんなにありませんので県外に出ると思うんで

すけども、よその市町村で、たまにニュースで見るふるさと便ですか、今コロナで困ってるから、ふるさとのおいしい野菜やお米を送ってそのついでに、ふるさと便りみたいなものを送って、郷愁を誘うといいますか、やはり地元を見て地元の良いところを知ってもらうということがまず第一じゃないかというような気がしておりますし、また、仮に帰ってくると言っても、今の若い子たちは核家族化で、親と一緒に住みたくないということで、住むところについて、高いアパートはあるけど安い市営のアパートが古くて汚くて住めないっていうような声も聞きますので、そこら辺でまた、単身ではないけども、若い子が好んで入るようなアパートそれから働く場所というようなものをやはり整備して、初めて安来に戻って来いって言えるような環境を作ってあげることが大事じゃないかというような気がしております。

○村社政策推進部次長

先ほどのインターンシップの件でございます。近々そういうところに繋げていきたいということを思っておりまして、先ほど説明しました取り組みの中でもインターンシップ先を開拓して、高校の生徒たちにいろんな職業を体験してもらうということは一つ目標としておりますが、今年度はまだそこまで繋がっておりませんけども、ここ近年は毎年企業見学会というのを必ず安来高校、情報科学高校ともやっておりまして、希望する生徒さんに貸し切りバスに乗っていただいて、あらかじめエントリーしたいろんな大きな企業小さな企業、規模は大小ございますけども、興味のあるところを回っていただいて企業側から説明を受けるというようなことは、この近年やってきております。ついこの間も情報科学高校が終えたばかりでございます。

それから大学で、とりあえず都会に出てしまった方へのふるさと便と定期便的なところですけども、まさにそこも大事だなと思ってまして、高校３年間でこれから、どっぷり安来のことを、いろいろ知ってもらうという取り組みをしますけども、やはり離れてしまった大学４年間でそこが薄れていくのは間違いありませんので、そこに対しての何かしらのアプローチ、働きかけ、コマーシャル的なものは、県もそこが大事だと言っておりますので、なかなか今具体化した形になったものがありませんけども、県も考えておりますし、安来ならではの形もあるのであれば、実践したいということで、今、検討がされてるとこです。

それから戻ってこられる場合の住むところがあるのか働くところがあるのかということですが、まさにそこに繋がってないと帰ってきていただくことができないので、そこもセットで考えていかなければなりませんが、なかなか全体像がまだ見えず手探りの部分がございまして、これからの取り組みを最終的に定住されるときの住宅、働く場所へ繋げていくというところですね。これから作り上げていくという部分が多いのかなと思ってますが担当課としてはいろいろ検討されてきているところでございます。

○加藤委員

高校魅力化推進事業ということで、最終的にはこれは地域の魅力化推進に繋げていかないと全く意味がないとは思いますけど、いい例があるなと今想像していたんですけども、安来には仕事だけじゃなくクラブ活動を盛んにしてる会社があります。そこは従業員が非常に若いですよね。背の高い人がいっぱいいる会社です。まさにそれは社長さんがそういう気持ちで、仕事だけでなく若い子たちの雇用を守りつつ、大好きなクラブ活動、バスケットですけど、言ってしまいましたが、そういうことに繋げていくって非常にいい取り組みだなと思っています。いろいろ賛否両論あるかもしれませんがそれがもう１０年以上続いてますので、これははっきりと企業としてそういった取り組みが必要だし、私もそうですけど、努力不足だなというふうに思います。

だけどそこを今こういったコーディネーターさんがおられるということもお聞きしましたので、単年度で単発的なインターンシップの呼び込みとかそういうことではなく、長年複数年にわたってそういう関係性を民間企業も持っていくべきでしょうし、そのためにはやっぱり子供達がわかっていないといけませんし、子供たち以上にその保護者さんたちが安来にはこういう会社があるんだよということを知ってもらうことが必要だな思いました。最近の子供達がわかりませんが、携帯でインターネットですべて就職活動もしてしまうような時代ですので、そうなるとあとはもう金額と待遇しかないですよね。何日休みがあるんだとか、福利厚生がどれぐらいいいんだろうかとか、ちょっと遠いけど行っちゃうかというような、そんな簡単な価値判断で決めてしまう。だから転職が多いですよね。２０代の子たちものすごい転職が多いんですよ。続かないんですよね。そういうような情報が、インターネットに載っているだけのことの繋がりしかないですから。

ただ、安来にはそういった取り組みしてる会社があるので、そういうところを参考にして続けることが、ネットワークとしてできればなかなか簡単にはやめられないという、上下関係の縛りも出てきたりとかですね。そういうこともあるので、やっぱ根性もつきますし、定住にも最終的には繋がってくると思いますので、是非ともこれは山根久美子さんに頑張っていただいて１人と言わず２人目、３人目のコーディネーターができて引く手あまたになって、今忙しいわぁというような状態になっていただければ、県外の方に募集をかけなくても、地元の方々だけでも十分、会社が存続できるというようなことに繋がってくると思います。私も今日はちょっと勉強さしてもらいましたが、知りませんでした。来年からそういうふうな繋がりが、持てるかもしれないということですね。ありがとうございました。

○議長（市長）

よろしいでしょうか。ご意見や質問いただいて、方針を示しました。これからの取り組みでございますので、いろいろご指導いただければと思っております。

それではこれで、県立高校魅力化推進事業につきましてのご説明は終わらせていただきます。

本日はこうやって皆さん方に審議いただきましたがそのほかで何かございますか。執行部事務局から何か。

○金山総務課長

はい。熱心なご議論ありがとうございました。

次回につきましては、教育大綱のない年には、例年大体２回開催しておりまして、大体２月ごろに開催しておりますので、今のところ２月上旬あたりで調整していきたいと思っておりますのでまた調整の上、お知らせいたしますのでよろしくお願いいたします。

以上です。

○議長（市長）

いろいろお世話になりました。

本日ご出席いただいております岡本教育委員さんにおかれましては、平成２９年から本年の１１月が任期となっておるようでございます。任期満了となります。今日が最後の会となります。長い間本当にお世話になりまして、ありがとうございました。

そういたしますと本日のこの会議は終了させていただきます。ありがとうございました。